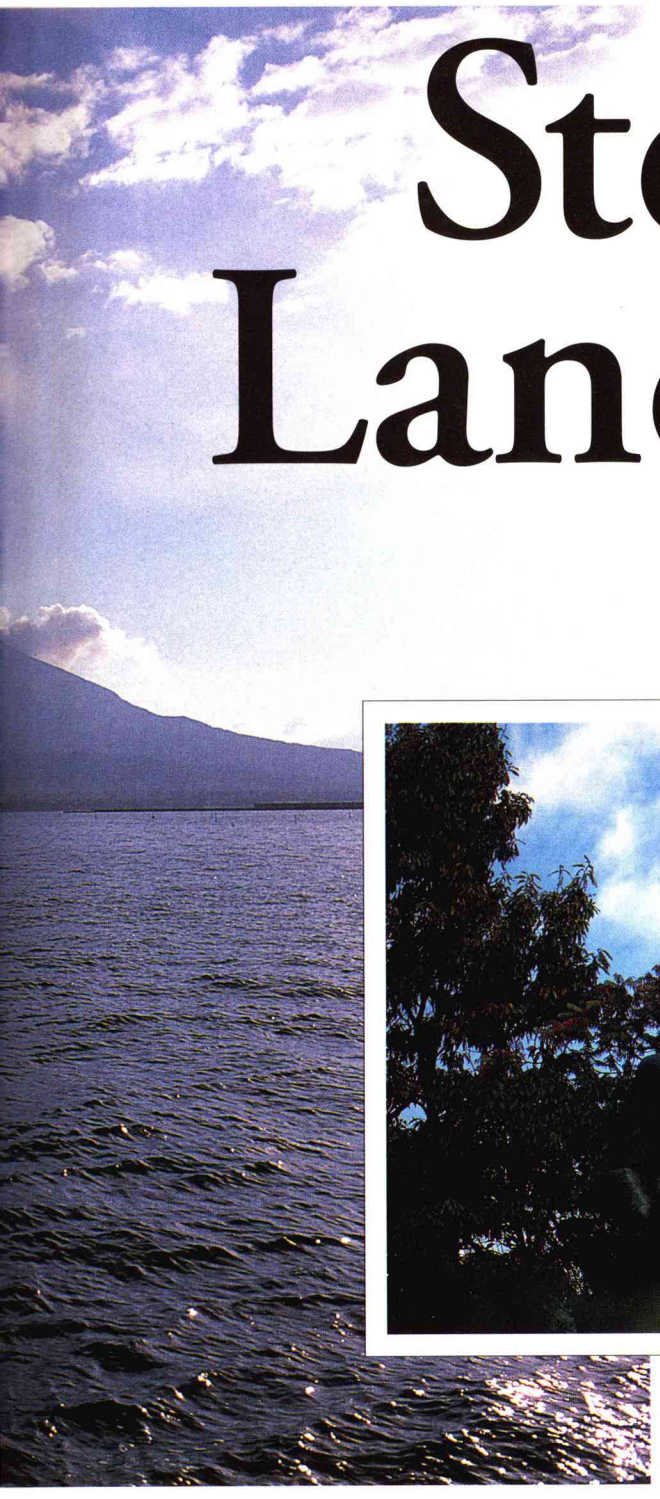
鹿児島湾内の桜島は、1914年（大正３年）に大噴火。そのとき対岸の大隅半島と陸続きになった。東京、大阪、薩南諸島とを結ぶ海の要所のシンボルだ

洋上の鉄～鹿児島

南陽を臨むオープンで豪放な土地柄もあってか、
鹿児島には「日本初」が多い。
種子島（鉄砲）の伝来、キリスト教の国内布教、
そして、蒸気船もまた、ここではじまった。
薩摩と蒸気船との関わりにスポットを当てる。

Steel Landscape.

鉄の絶景



おそらくは、日本でもっとも有名な鹿児島県人、西郷隆盛の銅像

世界の海へと躍り出た蒸気船、そして、鉄

レオナルド・ダ・ヴィンチでさえも、解答を見出だすことができなかった。紀元前より、人類が抱えていた問題がある。それは、なんとかして機械的に船を動かしたいということだった。人力に頼ることなく、また、いつ吹くとも知れない風を待つことなく、航海ができたら……。

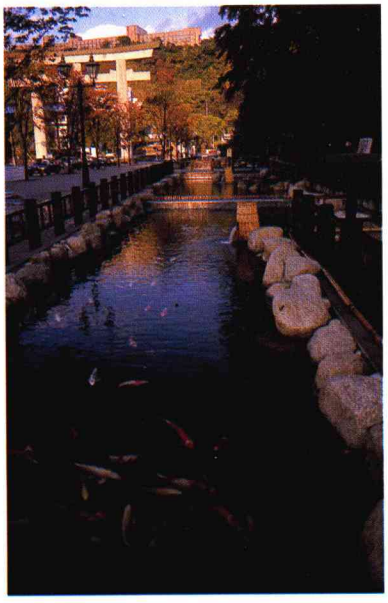
一般に蒸気船の発明者は米国人のロバート・フルトンであるといわれているが、じつはそれ以前にも蒸気機関についての研究は行なわれており、それを統合して実用化したのがフルトンであった。彼がニューヨーク－オルバニー間で、蒸気船による旅客輸送の定期営業を開始したのが1807年のこと。19世紀は、この船舶革命によって幕を開けた。人々は肉体労働と風頼みから解放された。

船体材料として広く鉄が用いられるようになったのは、それからしばらくしてからのことだ。はじめは、鉄で造った船は強度が弱いに違いないと考えられていた。ところが、1838年にイギリス海峡でたいへんな暴風が吹き荒れたとき、他の木造船がすべて破損した中で、たった一隻だけ無事だったのが鉄製のものだった。鉄は弱いという疑念は一度に払拭され、折からの木材資源の不足という事態も手伝って、鉄船がぞくぞくと造られていく。現在のように鋼が用いられるようになったのは、19世紀も末のこと。より安価に製造できるようになったのが、取って替わった理由であった。船体をより軽量化できる点も買われてのことだ。

北太平洋、南太平洋、北大西洋、南大西洋、インド洋、北極洋、そして南極洋。これを指して７つの海という。

鉄の船は、19世紀に世界の海へと躍り出た。

鹿児島市は、かつて薩摩77万石の城下町として栄えた。鹿児島城は鶴丸城とも呼ばれたが、1873年（明治６年）の火災で消失、石垣と堀のみが残る



市内の風景。動乱の歴史に彩られた、見所の多い観光地でもある

つねに開放的、先進的でありつづけた鹿児島

幕末の江戸を騒然とさせた四隻の蒸気船は、米国艦隊であった。「蒸気船たった四杯で夜も眠れず」という川柳が流行る。すでにあった茶の銘柄の名前をもじって、黒船騒動を詠み込んだのだ。

浦賀にペリーがやってきてからわずか２年後に、日本ではじめての蒸気船が建造されている。「雲行丸」と名づけられたこの船は、薩摩藩主、島津斉彬によるものだった。

代々、薩摩藩は「島津に馬鹿殿なし」といわれるほど、すぐれた君主を生み出してきたことで知られる。この斉彬もまた、勝海舟によって「幕末第一等の君主」と賞賛されるなど、名君として名高い。西郷隆盛の非凡を見出だしたのも彼であった。

斉彬の祖々父が「蘭癖」で知られる重豪だ。その影響を色濃く受けた斉彬もまた、西洋の文明を国内に取り入れようと尽力した。邸内に反射炉をはじめとする工場群を建設する。「雲行丸」の建造もまたしかり。日本初の西洋型帆船「昇平丸」も、彼によるものだった。

現在の鹿児島市は、薩南諸島と本土を結ぶ海の拠点となっている。また、東京や大阪に向けても旅客船などが就航しており、海運の拓けた印象を与える。幕末から明治維新、西南戦争、そして大正に入ってからの桜島の大噴火と、文字通り激動の地でありつづけた鹿児島。砂浜や珊瑚礁の映像が、この県の印象としてはじめに浮かび上がってくる。そして、美しい山岳。霧島連峰、そして桜島。一方で、「台風銀座」という、あまりうれしくない側面もある。ちょうど台風の通り道に位置し、その被害も多い。

美しい自然は、同時に厳しくもある。そんな中で、豪放ともいえる気質が形作られていったのだろう。谷崎潤一郎の「台所太平記」に出てくる女中はほとんどが鹿児島出身であったことが思い起こされる。あの登場人物たちに見られたような、開放的で先取の気性にすぐれている気質は、歴代の君主からはじまって、いまもこの土地の人々をいい表す賛辞となっている。

［撮影：岡島善文］